Japanese Association of Educational Psychology

り生活歴，学歴，職歴の影響をうけていることがわかつた。

すなわち，特殊学級の教師の実践的指導のもとになる考え方は，現実的にはそれまでの教育歴を中心とする経歴によつて規定されやすいといえるようである。

討論の概要

部会は類型学的研究以外の精神薄弱児に関する研究によつて構成された。それが発達，治療，教育過程とそれに影響をおよぼす要因という特色をもつた研究領域になりえたことは逆に類型学的研究のもつ方法論的有限性を示すことになるかもしれない。対象としては乳児，幼児，児童が含まれ，場所も家庭，施設，特別学級，養護学校，精神病院，少年院と多方面にわたつていたがそのわりには発達障害研究法としてのゆたかさがあらわれていなかつた。質疑応答が対照群の欠除，グルーピングにおけるCA，MAへの配慮の不足，臨床的追求の不足，方法のもつ意味の異質効果性への配慮の不足などといつた基本的な手続き上の欠陥にむけられていつたことなどは，この部会でもちいられた方法論が類型学的研究法の限界を克服するだけのものをもつていたとはいえないことをものがたる。また，得られた結果が精神薄弱児に対する治療，教育対策としてみようとするとどれ程の応用性をもつか，さらには対象が受動的にしかとらえられていない点を中心に，そこに方法のもつ妥当性，人間観の問題にまで討論が重ねられていつたことも教育心理学会らしい特徴であつた。

宿題テーマとしては特殊学級教師の行動のパターンの形成と変化をとりあげてはどうかということの検討が座長に一任された。（守屋光雄）

精神薄弱児 II

精神薄弱児の知能発達

宮本茂雄（科学警察研）

精神薄弱児の知能構造の発達的変化をみるために鈴木ビネー知能検査を継続的に行なつた結果を内因，外因別に項目分析を行ない，比較のために普通児の結果を原検査から借用した。すべて同一MAをもつて比較した。

結果を要約すると，同一MAで普通児の通過率のよいのは数的なものに関係ある項目であり，成績の悪いのはいわば，日常の経験的常識的な項目である。すなわち知能検査には知性を必要とするものと，むしろ経験だけでできる項目が混在していると考えられる。内，外因の比較では数的な問題と常識（了解）問題で内因がすぐれている。外因のすぐれているものは事物の名称を列挙するような問題である。すなわち単純記憶は外因性精薄のすぐれている点であり，内因のはいわば発達的に考えるならば，遅進的ではあるがノーマルといつてよいように思われる。

精神薄弱児の能力段階（第2報告）

田中麗之助（愛育研）

A）生活習慣　B）運動機能　C）社会性　D）表現能力　E）作業能力の5領域を含む能力段階尺度を用いて，痴愚級精薄児 47 名の能力に現われた歴年令効果（精神年令が同じで歴年令の高い者の能力に現われる生活効果とでもいうようなもの）を考察した。

結論　1.　痴愚級精薄児(IQ 平均 38, CA 平均10：8)において能力の一部の領域で歴年令効果が見られた。

2.　MA 3 才児では，A生活習慣のⅠ食事とⅡ被服，D表現のⅠ描画とⅢ紙工で著しい歴年令効果を見た。

3.　MA 5 才児では，C社会性，DⅠ描画，E作業能力において著しい歴年令効果を見た。

4.　MA 3 才精薄児の年長児群は年少児群に比し，特にAⅡ被服，CⅠ学校生活，CⅢ社会生活意識，DⅠ描画，DⅢ紙工，EⅠ清掃，EⅢ調理の面で高い能力段階に達している。

精薄児の分類

沢　英　久（長崎大）

精神薄弱児の知能研究に当たつてわれわれは Altitude の考想を適用した。Altitude の立場をとると，若干の精薄児を，厳密な意味で，より適切に位置づけることができる。このことを他の側から明らかにするために，菱形，蜂の巣，三角形，格子，円筒，円錐などの描画を実施した。その結果，WISC 全IQ の 66 以上の被験者は上記描画にほぼ合格するのであるが，IQ 65 以下の精薄児の描画は蜂の巣において各蜂の巣が分離する精薄の特徴を明確に示すと同時に円筒，円錐――上底，下底は赤の色紙がはつてあり，被験者は描画の前に，触覚にうつたえて，その後描写させる――の写生においてはレントゲン画，提灯画，ラッキョウ画など明白に未分化の様相を呈している。しかも，IQ 49 以下の精薄児の WISC 各下位テストの得点は最高得点の 1/8 以下で，不治のものと診断する以外に方法がなさそうである。

精神薄弱児の類型差についての研究

○木村謙二・○東　正（北海道大）
○北島象司（北海道教育研）

I

NII-Electronic Library Service